

## 東日本大震災からの復旧・復興 新しい時代の都市・地域計画を切り開くために



夢はバラ色

木 多 道 宏\*

Restration and Reconstruction of damaged area  
by Higashinohon Earthquake  
Development of Urban and Area Planning for the New Age

Key Words : Disaster of Earthquake, Restration, Reconstruction, Urban Planning, Community

東日本大震災を題材として、「夢はバラ色」の紙面への投稿の機会をいただきました。しかしながら被災地の状況は依然「バラ色」の状況とはかけはなれており、むしろこの紙面をお借りして、今回の被災をどれだけ「前向き」に捉えることができるかという観点から執筆させていただくことといたしました。

### 1. 集落・都市の持続的発展

三陸・仙台・福島集落と都市は、明治三陸地震津波、昭和三陸大津波、チリ地震津波などを経験しながら、何度も復旧・復興を繰り返しており、さらに戦災復興や戦後の都市計画による大改造など、空間や社会を改変するような出来事が連綿と積層されて成り立っている。今回の復興計画を大規模なインフラストラクチャの計画にとらえるのではなく、持続的で発展的なプロセスとして考えることが必要である。日本建築学会の地域文脈形成・計画史小委員会（主査：筆者）が東日本大震災からの復旧・復興への提言「東日本大震災と都市・集落の地域文脈—その解釈と継承に向けた提言—」を執筆した（<http://www.area-context.com/> からダウンロード可）。これによれば釜石では、明治三陸地震津波、昭和三陸大津波、戦災と壊滅的な被害を受ける。特に明治当初の入り組んだ街路網が人々の避難

を妨げた可能性が高く、釜石における復興計画は常に街路網の改善を主題としてきた。明治津波後に山へと直線的に向かうタテの街路網を導入し、昭和津波後にはこれが拡幅された。さらに戦災後にはシンボル建築を街路沿いに建設することによって、山へと繋がる街路のイメージを人々に印象づけてきた。都市の骨格に減災のイメージを表現することが、釜石に継承されてきたテーマなのである（文1）。一方、市民側にも創意工夫の歴史があり、タテの動線を上った先の地域では年月をかけて山へと抜ける近道のネットワークが形成されている。また、避難してきた人々を地域ぐるみで受け入れる共助のしくみも伝承されていた（写真1）。ここでは2ヶ月にわたり、被災者約60名を各民家に受け入れ、住民とともに約100名が毎日共同で炊き出しの食事を食べた。山から水を引いた水場も継承されており、水道が回復するまではこの水を利用したとのことであった（文2）。



写真1 斜面地の住宅地



\*Michihiro KITA

1964年10月生  
大阪大学 工学部 建築工学科 (1988年)  
現在、大阪大学 大学院 工学研究科  
地球総合工学専攻 建築・都市デザイン  
学講座 教授 博士(工学) 建築計画・  
都市デザイン  
TEL : 06-6879-7639  
FAX : 06-6879-7641  
E-mail : kita@arch.osaka-u.ac.jp

釜石は都市計画の普遍のテーマを、プランナー側と住民側とが共有してきたモデルではないかと考えられる。安全な都市、減災を実現する都市とは一時に完成されるのではなく、都市計画と社会システム

の双方が（無意識のレベルも含めて）普遍のテーマを共有し、持続的に改善を積み重ねることにより達成されるものである。いくつもの災害を乗り越える持続的発展のモデルとして、他の地域の対策や復興に重要な示唆を与えている。

## 2. 創造的復旧・創造的縮退

政府は東日本大震災からの「水産復興マスタープラン」（平成23年6月28日策定）の中で、「漁港機能の集約と役割分担」や、「漁船・漁具など生産基盤の集約化と共同化」を打ち出した。自治体レベルでもこの考え方を踏襲し、宮城県女川町が15の漁村集落を2カ所に統合する方針を打ち出した。これらの集落の人口は約20名～200名程度にすぎず、全てを個別に復興することは、行政サービスの効率性や財政面でも、今後さらに進む人口減少の面からみても非現実的である。一方、女川町の住民は、集落の統合に対して強く反対したため、町の復興計画は集落の統合に触れずに策定されている。町は統合を断念し、個々の集落による単独復興（高所移転）を容認している状況である。しかし、「大きな計画」は過剰な投資になる。人口減少や低成長の傾向は震災前から進んでいた。それが震災によって顕在化したということである。「個別」か「集約」かといった二極対立を超えて、新しい計画のスキームを見出す必要がある。

もし仮に単一のコミュニティが移転に成功したとしても、人口減少が進めば、閉鎖的な社会はいずれ消失する運命にある。常に新しい人々が入りながら、新旧の人々が創意工夫によって生き方を共有し、新しい時代なりの生き方へと発展されていく。今回の震災を、新たなコミュニティへの発展を見出すプロセスとしてとらえられないだろうか。

中越地震で被災した山古志村の人々も仮設住宅での暮らしを余儀なくされたが、たまたま仮設住宅地の間に設けられた仮設農園で普段は付き合いのない人々が出会い、地元野菜の共同栽培や郷土料理の普及活動、農産物直売所の共同運営など、思いもよらない事業が展開された（文3）。家や集落といった閉じた社会の中で行われていた農作業が新たな形態で展開され、新たな価値を育んだのだといえる。仮設住宅での暮らしは厳しいものであるが、人々の人生の文脈の中では負の経験でなく、新しい暮らし方

の創造に生かすことができたと解釈したい。「創造的復旧」あるいは「創造的縮退」、つまり人のつながりを発展させることが真の「復興」であるとも言える。

ひとつのコミュニティが同じ敷地内の仮設住宅にまとまって入居することは、コミュニティの持続のための基本であるが、それが無理な場合にはむしろ地域を広くとらえ、仮設住宅が分散したとしても、移動手段等確保したゆるやかなネットワークの中に配置し、他の集落の人々との接点を意識的に誘導することも考えられる。

## 3. 「大切なもの」の再発見と継承

全てが流されてしまった中で、継承すべきものは何か。それは日々の暮らしや祭礼における創意工夫、これまでの地域づくりや復興計画の思想など、人の空間への働きかけ方、空間が育まれ形成される原理といった普段は目に見えないものであろう。

筆者らは宮城県女川町の15の漁村集落を調査している（図1）。地元の方々に震災前の自宅の間取りを思い出していただくと、民家にはイマ、オカミ、ザシキの配列の型が共通して見られることが分かった（図2）。オカミの南側（ハマ側）にはエンガワがあり、今の養殖業が普及する以前には、小漁師（コリョウシ）がここで釣り針やはえ縄の手入れなどをしたとのことである。また、結婚式の際には入口となり、葬式では棺の出口となり、土葬をしていた時代には、葬列の人々が墓地まで持ち歩く各種の道具を創作する場所でもあった。最近では漁港の番屋が作業場となり、エンガワで漁業の仕事をするとはなくなり、葬列などの慣習も失われているものの、震災の直前までは、お盆の日にエンガワの外から（対面する）仏壇に向かって女性たちが歌うという「梅歌講」（バイカコウ）の慣習が残っていた。間取りには、いまだ慣習と結びついた固有の型があり、ここでの記憶や生活の仕方が人々のアイデンティティになっている。

女川町の漁村集落群のうち、例えば竹浦では非常にきめ細やかな社会グループがあり、地縁で結ばれた班と、血縁で結ばれたマゲといわれる家のまとまりがある（図3）。傾斜地の石垣の段差や路地の単位が、これらのグループを形成するきっかけとなり、一見「未分化」な配置形態にも一定の構造があるこ

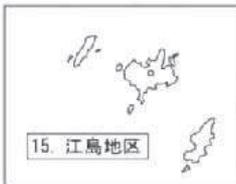


図1 宮城県女川町における漁村集落

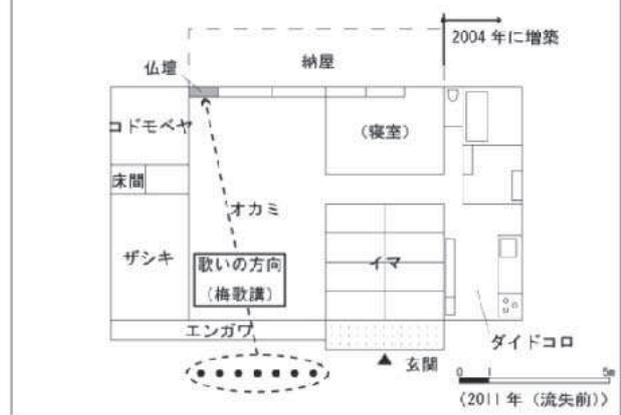
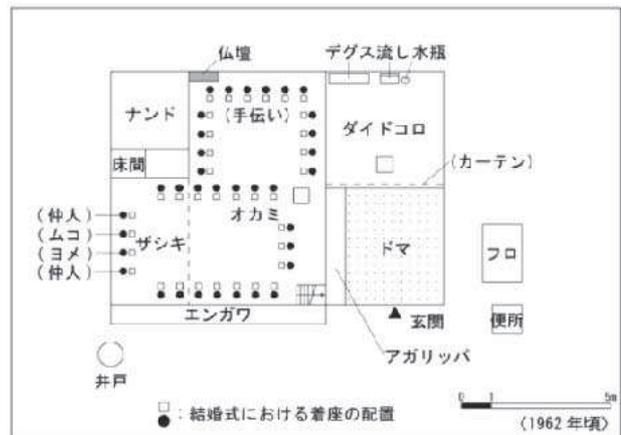


図2 記憶から起こした民家Bの平面図

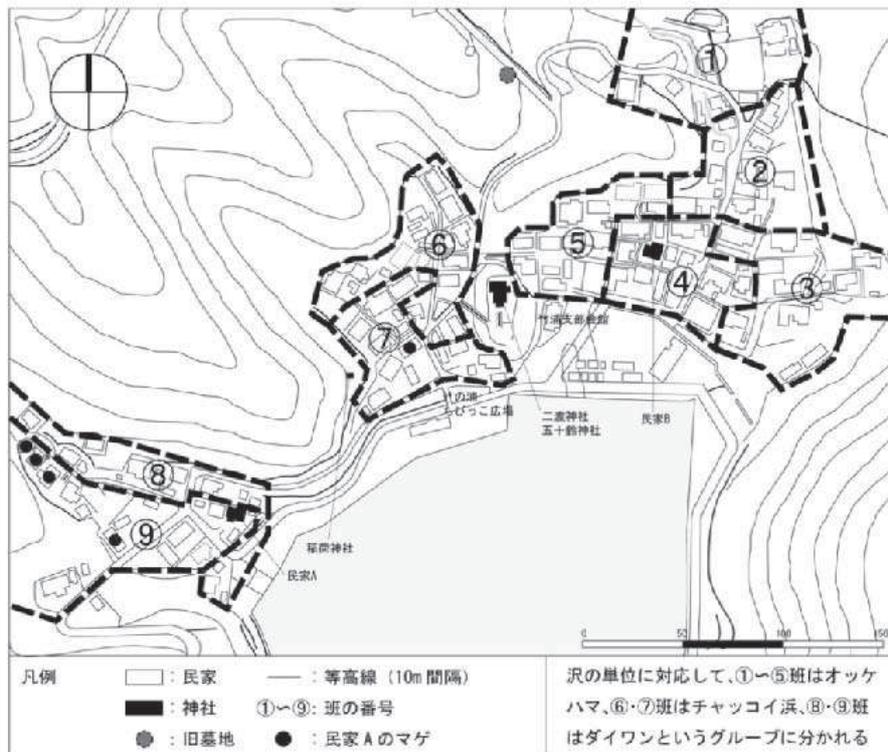


図3 女川町竹浦集落の社会空間 (被災前)

とがわかる。間取りの型が再形成されるような街区の構成、クルドサック（袋小路）や人が乗り越えられる程度の石垣など、社会グループが形成される小さな「依り代」を設計するなどの配慮が必要であると考えられる。

今回は紙面の都合により割愛するが、漁師の方々へのインタビューにより集落群が同じ海域を棲み分けるしくみの存在することが明らかになった。隣り合う集落の代表者が海上で立ち合い、「根」と呼ばれる岩の突端と遠方の標識（山頂、窪地、林など）を選定し、両者を結ぶ線で漁場を分けるというしくみである。境界線の存在を知るのは隣り合う集落どうしに限られるため、今回初めてその全容を記録することができた（文2）。この地先権という棲み分けのしくみは江戸時代から存在すると言われ、これまでに集落の経済や社会の情勢に応じて何度も境界線が変えられてきた。湾の資源を守り分かち合うフレキシブルな漁場運営のシステムとして評価できよ

う。高所移転の計画に、海上の社会システムをどのように持ち込むかも、地域固有の住宅地を実現するためのヒントとなるであろう。今後も学生とこれらの活動を継続し、その成果を復旧・復興に役立てていきたい。

#### 参考文献

- 文1：中島直人：記憶力豊かな三陸沿岸都市の姿  
—意図の蓄積としての都市—（\*）
- 文2：木多道宏：地域文脈の継承に向けたガイドラインの提言（\*）
- 文3：清野 隆：集落空間の再生と社会システムの継承 —旧山古志の経験—（\*）
- \*文1～3は「東日本大震災と都市・集落の地域文脈 —その解説と継承に向けた提言—」（日本建築学会 都市計画委員会 地域文脈形成・計画史小委員会，2012年3月）に収録

